

# 「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者発表（敬称略）

受賞者名をクリツクすると作品に移動します。

【文部科学大臣賞】 三重県 鈴鹿工業  
高等専門学校 三年

恒川凛太郎（体験書籍「図鑑を見ても名前がわからないのはなぜか？ 生きものの初めて見た見慣れた世界」）  
\* 同定 \* でつまずく理由を考えてみる「須黒達巳 ベレ出版」

【全国高等学校長協会賞】 鳥取県立鳥取湖陵高等学校 二年

能勢奈月（体験書籍「日は好日」「お茶」が教えてくれた15のしあわせ」森下典子 新潮社）  
一瞬と、向き合う

【全国高等学校長協会賞】 鹿児島県立鶴丸高等学校 一年

飛永大維（体験書籍「きよしこ」重松清 新潮社）  
僕の個性

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 東京都 恵泉女学園  
高等学校 一年

加藤早純（体験書籍「逆ソクラテス」伊坂幸太郎 集英社）  
白い太陽の道を歩む

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 石川県立金沢泉丘高等学校 三年

鈴木侑羽菜（体験書籍「合本俳句歳時記 第三版」角川書店 編 KADOKAWA）  
俳句甲子園漫遊記

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 山梨県立都留高等学校 二年

小宮あかり（体験書籍「31cm ヘアドネーションの今を伝え、未来につなぐ」NPO法人JHD&C監修 KulaScip）  
決定！ 夏休み明けの目標

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 愛媛県立小松高等学校 二年

曾我部 愛（体験書籍「ぶらんこ乗り」いしいしんじ 新潮社）  
私にとつてのファンタジー

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 沖縄県立知念高等学校 三年

伊禮愛瑠（体験書籍「小説 透明なゆりかご」上・下 橘もも）  
精一杯に輝く命のために  
沖田×華 原作 安達奈緒子 脚本 講談社）

# 「全国高校生読書体験記コンクール」について

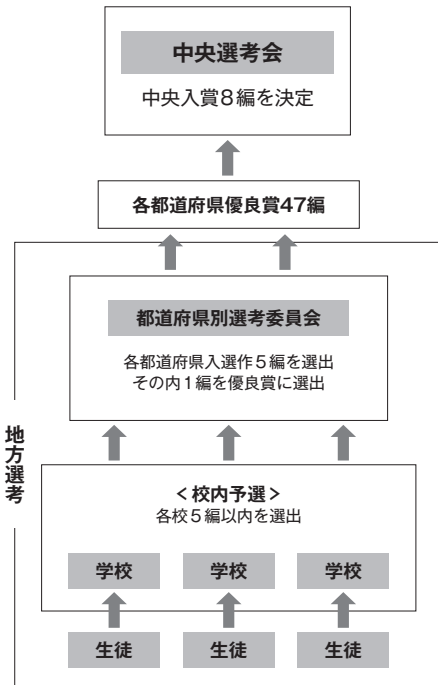
このコンクールは、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社のご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」とともに実施している事業です。多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのような行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

第42回の本年度は、全国47都道府県から424校の参加があり、応募作品は76,163編となりました。

## 【選考】

- ◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。
- ◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考会に送られました。
- ◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。

【作品の応募と選考の流れ】



【賞】

中央入賞 8名

- ・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品
- ・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品
- ・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品

\*中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞 39名 賞状・記念品

\*優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選 188名 賞状・記念品

\*入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央選考委員(敬称略)】

- 辻原 登 (作家)
- 穂村 弘 (歌人)
- 角田光代 (作家)
- 宮崎活志 (文部科学省初等中等教育局主任視学官)
- 林 達也 (全国高等学校長協会)

【主催】

公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

## 【文部科学大臣賞】

# 初めて視た見慣れた世界

「知っていることが多ければ、自分にとつての世界は豊かになり、楽しみにあふれ、きつとそこそが教養の意義なのだろうと思います」

『図鑑を見ても名前がわからないのはなぜか？ 生きものの「同定」でつまづく理由を考えてみる』というタイトル。樹木を同定するための図鑑を探しに書店を訪れていた私の注意を引いたのは必然だった。本書で特に感銘を受けたのが冒頭の一文である。本書には、著者が初心者目線でシダ植物の同定に挑む章がある。読後の私は自分

にとつての世界を豊かにするため、とりあえず著者の真似をしてみようと図書館でシダの図鑑を二冊借りて観察に向かった。シダを初めて発見したのは、近所では比較的自然豊かであろう神社の境内だった。そこでこれまでの人生で注目したこともなかった足元の植物の正体を突き止めるため、図鑑を開く。

覚悟はしていた。図鑑と照らし合わせるだけで簡単に種類が分かるのならそもそも『図鑑を見ても名前がわからないのはなぜか？』などという題名の本は出版されてい

ないだろうし、それは本書を読んだ時にも実感していた。散々歩き回ったのにろくにシダを見つけれず、数少ない見つけたものの名前も分からず、家に着いた時に得ていたものは多数の蚊に血を奪われた痕跡だけ。撮ってきた写真もぼやけており、初めてのシダの同定への挑戦は完全敗北に終わった。

しかし挫折感はあまりなかった。始めはできなくて当然である。「教本を買っただけではバイオリンは弾けない」。同じように、図鑑を買っただけでは同定はできない

三重県 鈴鹿工業高等専門学校 三年

恒川凜太郎

のだ。感覚を鍛える必要がある。同定において感覚を鍛えることは、「目をつくる」と本文中で表現されている。目ができていない私が初日に同定を完遂するなど、初めて泳法を学んだその日に百メートルを泳ぎ切るようなものである。

初日に泳ぎ切れなかった私は別の日にも観察に出掛けた。気が付けば約一週間、シダの同定への挑戦を最大の目的として過ごしていた。家族の運転する車に乗り込めば車窓からシダを探し、雨の日にも公園を歩いた。何を原動力にそこまで行動していたのかは分からない。場所を変えつつ観察を続けていたある日、葉が赤みを帯びたシダを発見した。赤みを帯びたシダは見たことがなかったが、同じ株から生えている緑色の葉には見覚えがあった。初日に観察したあのシダだ！赤みを帯びた葉の存在や、葉や胞子囊群の形から、目の前のシダとあの日のシダはベニシダであるだろうという結論に至った。

その翌日に訪れた公園は、ベニシダにあふれていた。そこは一昨日、つまりベニシダを認識する前日にも来ていた場所だったが、確かに印象が違っていた。ベニシダの

多い公園で、ベニシダが多いと感じる、これには何の不思議もない。しかし、一昨日はそれを感じなかった。視えていなかったのだ。かつての私の目は単にベニシダに反射した可視光を捉えていただけで、視えてはいなかった。

これだ。知っていることが増えた結果、世界が豊かになるという言葉を実感的に理解できた気がする。判別できるようになった種数は片手でも数えられるほどで、それらの知識もまだ浅いが、確かに自分の世界が少し変わった感じがした。目ができてきた。かつては背景でしかなかったものが、一人のキャラクターとして物語に登場するようになった。

同日私は、シダのぜんまい型の新芽を初めて視た。別段珍しいものでもないはずだが、妙に感動してしまった。いくらなんでも十七年以上生きていてたつたの一度も見ることがないなんてことはないだろう。しかし、初めて視た、というのが最も適切な表現だと直感した。これに関しては目ができてきた訳ではない。ただ注目して視た、それだけだった。

気が付いた。ベニシダを認識したことで

初めて自分の世界が変わったと思っていたが、違う。それは二度目だ。既に変わっていた。完全敗北を喫したと思った初日、背景だったものを視ようとしたその時、一度目の変化は訪れていたのだ。考えてみれば、車窓からシダを探したり、雨の日には観察に出たりはほんの一月前の自分には考えられない行動だ。分からなかったその原動力は、きっと新たな世界への好奇心だったのだろう。初日に挫折感をあまり感じなかったのは、目をつくるのには時間がかかるという理屈のみが理由ではなく、楽しみにあふれ始めた世界を既に楽しんでいたのであるのだろう。観察の初日に私は、シダの存在を初めて知り、シダが視えるようになったのだ。

未知の喜びの源泉、それを宝箱に例えるのは陳腐かもしれないが、私には宝の地図が視えるようになったのだろう。知れば世界は豊かになり、楽しみにあふれることを知ったのだから。

体験書籍

『図鑑を見ても名前がわからないのはなぜか？  
生きものの「同定」でつまづく理由を考えてみる』

須黒達巳 ベレ出版

## 【全国高等学校長協会賞】

# 一瞬と、向き合う

鳥取県立鳥取湖陵高等学校 二年

能勢奈月

フェンシングを始めたのは小学校二年生の時だ。小学生の頃は、闘うことが、勝つことがひたすら楽しかった。いわゆるスランプに陥ったのが中学二年生。何をしてもうまくいかず、とにかく勝ちたいという思いだけが先走り、その結果、体も心もフェンシングを拒否した。フェンシングが、嫌

いだった。フェンシングを嫌いな自分も、嫌いだった。そして、高校受験を言い訳にして、フェンシング界から離れた。二度と戻るつもりはなかった。

「日日是好日」。見たことがあるようでない

いようで、意味がわかりそうでわからなさそうなの言葉に心惹かれてふと手に取ったのは、高校二年生の夏だ。

高校入学と同時に、私はフェンシング界に再び足を踏み入れていた。中学時代、どうしても勝てなかった憧れでありライバルでもあるあの人に、勝ちたいという思いが蘇ってきたからだ。高校では再び勝利を体験した。しかし、何かが足りない。そんなもやもやした思いが胸にわだかまっていた。著者は、大学三年生の春から、同い年の従姉妹と共にお茶を習い始めた。「就職に

つまずき、いつも不安で自分の居場所を探し続けた日々。失恋、父の死」。次々訪れる悲しみの中で、彼女には、気づけばいつも「お茶」があった。「お茶」を通して、「季節を五感で味わう喜び」とともに、「いま生きている！」その感動」が物語から伝わってくる。読み進めながら、この一文が目

に飛び込んできた。「雨の日は、雨を聴くこと」。雨の日は嫌いだという人も多いだろう。しかし私は雨が好きだ。雨の音は、自分もずっと頑張らなくてはダメだという思いも、他者から評

価値が好かれなければ自分は無価値なのではないかという不安も、人に弱みを見られたくないという恐怖感も、すっと消していつてくれる。彼女の言葉にそんな共感を覚えた時、何かがストンと腑に落ちた。「日は好日」毎日がよい日。

私は、勝ちたかった。高校一年生の時、全国高校総体の出場権を勝ち取った。大会当日まで一心不乱に練習した。会場で場慣れすることにも自信があった。だが、当日。今まで経験したこともない冷たいような熱いような空気に飲み込まれた私は、練習の成果を発揮するどころか手も足も出せぬままに、高校一年生の夏は終わった。自分に欠けているのは何か。悩んでいる時に読んだこの本に教えられた。「日は好日」著者のお茶との付き合いは二十五年。私のフエンシングとの付き合いは十年。優秀を求めないお茶の世界と、勝ちにこだわる私。相容れないようだが、雨の音を聞くことへの思いは同じだった。その一瞬の空間に身を委ね、自分一人と向かい合う。他者との比較ではなく、自分自身を認める瞬間。がむしゃらに勝ちたいと硬くなるのではなく、自然な自分になって相手と向き合い、相手

とのこの一瞬の闘いを思う存分楽しむこと。私に欠けていたのは、「今のこの一瞬を楽しむこと」だったのだ。

お茶の世界では、毎日毎日を好日だと捉え、感じ、大切にしよう。私も、一日一日を大切に過ごしたいと思った。それまでの私は日によって波があった。一時の気分や感情に流され、不愉快がそのままフエンシングに現れていた。思えば、お茶にもフエンシングにも「型」がある。流れるような型を身につけ、相手と向き合い闘うのがフエンシングだ。試合相手との、何ものにも代えがたい試合時間を、感情に流されるような不安定な自分でいたくない。そう考え、一日一日の過ごし方を変えた。試合前のルーティンを整え、食事への向かい方も変えた。ただ食べるのではなく、試合へのスタミナ回復や体力の回復を考え、食事の質を高めた。食事へ向き合う姿勢の変化は、食に携わる人への、自分を支えてくれる人への感謝へと変わっていく。そしてフエンシングへの感謝へと変わる。

私たちは、新型コロナウイルスに翻弄されている。様々な制限がかかり、我慢を強いられてきた。今までの当たり前が一変し

たこの二年間、はたしてどれほどの人が「今」を味わえているだろうか。未だにマスクの下を見たことがない友人がいるこの時代に、私はフエンシングをできている。それは、なんて幸運なことだろう。フエンシングでつけるマスクの下の顔を見ることがなくとも、自然体であれば、相手の呼吸が聞こえてくる。高二の秋の試合で、見えなくとも感じるこのことのできるこの一瞬を、心から楽しいと思えた。

フエンシングが好きだ。フエンシングをしている自分も好きだ。私と対戦してくれるライバルの存在も、試合会場の空気も、ここまで来させてくれた何もかもが大好きだ。勝利にだけ固執していた頃は感じることもなかったこの思いが、私を強くしてくれる。自然体の自分で、今この瞬間を大切に。それが今の私のスタンスだ。私は再び全国を目指す。次はどんな相手と出会えるだろうか。楽しみでならない。毎日毎日が、私の大切な好日だ。

体験書籍

『日は好日』

「お茶」が教えてくれた15のしあわせ」

森下典子 新潮社

## 【全国高等学校長協会賞】

# 僕の個性

鹿児島県立鶴丸高等学校 一年

## 飛永大維

まず、僕「飛永大維」の自己紹介をした  
と思う。二〇〇六年十月四日生まれ。好  
きなことは散歩。理由は空想上の親友「町  
田隆史」通称「町田」と話せるからだ。苦  
手なことは職員室に入室する儀式と句読点  
が来ることに音読する人を替えていく、い  
わゆる「丸読み」だ。理由は、「どもる」  
からだ。

わざわざかぎかっこを用いて「どもる」  
という言葉を使うのにも、当然理由がある。  
それは僕の脳内辞書に最近追加された言葉  
であり、少し大きめの赤い文字で書かれて

いる特別な言葉でもあるからだ。僕はこの  
十五年間、「吃音」や「どもる」という言葉  
と出会わなかった。小学生の頃、母に吃音  
のことを告白した時も、母は気を遣ってく  
れたのだろうか、僕に吃音やどもるといっ  
た言葉を教えなかった。そんな僕が「吃音」  
や「どもる」といった言葉を知れたのは、  
『きよしこ』を読んだからである。言葉を  
知って初めてそれらが自分だけの感覚でな  
く、大勢の人々に認識されうる感覚である  
ことに気付き、僕は孤独から解放された。  
『きよしこ』を読み始めた時、僕は他の小

説と違って、僕側の世界と本の世界の壁を  
感じなかった。すっと、滑らかに主人公「白  
石きよし」の世界に入れたのだ。作中で主  
人公は終始「少年」と書かれている。少年  
と僕は似ていた。僕達は言葉の頭がつか  
える。少年は、カ行やタ行でつかえ、同  
じように、僕はア行やヤ行でつかえてし  
まう。他にも、決してどもらずに話せる空  
想上の親友がいることや名前を言うのが苦  
手なこと、吃音で「辛い」「苦しい」思い  
をしたのも合致する。

「辛い」や「苦しい」と「苦手」なことは



異なる。僕の苦手な職員室に入室する儀式や丸読みは多少の我慢で乗り越えられる。また、前者は社会人になるための練習になり、後者は学習に良い効果を与えるなど、両方とも大切なことだ。しかし、「辛い」や「苦しい」は、耐えていても痛みが弱くならない。例えば、僕はア行でどもるため、「ありがとう」と滑らかに言えず、お礼を伝えるタイミングを失う。また、今こそ伝えるべき、伝えなければいけない時に人の名前を呼ぼうとしてどもってしまう。その度、僕は比喻ではなく、胸をえぐられて苦しくなり、あまりのやるせなさに泣きたくなる。そして、少年と同様に、空想上の親友が慰めに来てくれる。

しかし、僕と少年の間には一つの大きな違いがあった。それは、少年の吃音を理解する友達がいたことだ。僕にはまだそんな友達はいない。『きよしこ』を読み終わり少年を少し羨んだ。というよりは憧れを抱いた。僕も友達に吃音のことを知ってもらいたくなった。僕や少年のような人に気遣ってほしいのではなく、ただ知ってもらうだけでいい。知ってもらうことで、僕は頭の片隅にでも存在できるのだ。行動を

起こせば自分の思う通りになるほど現実都合よくないが、かと言って、黙ったままで望み通りになるとも限らない。僕は友達に「吃音」のことを告白すると決めた。

僕の望みはただ知ってもらうだけだ。そのため、伝える時の表情や声色、流れまで考え迷った。反応が怖かったからだ。「吃音」のことでからかわれるのはもちろん、何よりも気を遣われるのを恐れた。気を遣われると、申し訳なさを感じてしまう。考えた末、普段通りに『きよしこ』の感想を伝えながら告白するのが最適という結論に達した。

話自体は、ずっと伝えることができた。僕は一つ、自分が傷つけないための対策を立てていた。それは、望み通りになるなど期待しないことだ。が、その考えとは裏腹に、友達の対応は最高だった。彼は、僕の告白を受けた後、それまでと変わらず接してくれただけでなく、『きよしこ』を読んでもくれたのだ。

僕は優しい友達を持った。

その後も職員室に入る儀式や丸読みは相変わらずだ。時々、調子の良い日があるくらいだ。だが、僕は気付けたのだ。「吃音」は

普通であることに。以前はどれほどの人がどもる感覚を持っているのだろうかなどと考える時期もあったが、もうどうでもよいことだ。視力の弱い人がいるように吃音の人もある。それに僕は、空想と現実の両方に吃音を理解してくれる友人を持っている。

僕は、高校一年生になった。最近の僕の吃音は少し軽くなったような気がする。僕自身が吃音を普通だと認めたことで、周りの人も僕の吃音を受け入れてくれてると信じられるようになった。今、僕の周りの人達は、例え僕がどもったとしても顔色一つ変えずに耳を傾けてくれる。みんな優しい。僕の世界は少しずつだが確実に良い方向へ変わっている。そして、町田は僕を見守る時間の方が増えたようだ。どもる時にはどもるのだが、大丈夫に決まっている。

例えこの先、吃音について心ないことを言われたとしても、僕は決して嫌な顔はしないつもりだ。僕の吃音は、僕の個性でもあるからだ。

体験書籍

『きよしこ』重松 清 新潮社

## 【二ツ橋文芸教育振興会賞】

# 白い太陽の道を歩む

東京都 恵泉女学園高等学校 一年

加藤早絢

「強情なことを言わないで言うことを聞くうね。太陽が白なんておかしいよ」

小学校の頃のほんやりとした記憶がふと思い出された。図工の授業で教室を歩き回る先生を横目に、思い思いの景色を水彩絵の具で呼び起こしていた時。題材にした写真には太陽が写っていた。当たり前だが、肉眼で太陽を捉えようとしても白く光っているだけで絵に描くのは難しかった。先生に聞くと、黄色やオレンジを使用すればいいと言われた。おかしいと感じた。私にはそれが黄色、ましてやオレンジのように色

鮮やかには見えず、それは描写ではなく創造だった。もつと言えば嘘だった。頑固に食い下がった私に、先生は怒ったような半ば呆れたような表情で冒頭の一言を放ったのだ。今まで特別に根に持っていたわけでも心に傷を負っていたわけでもないのだが『逆ソクラテス』を読み終えた時、突然この場面が本のページを開くように浮かんできた。

小学校低学年の頃、先生という存在は学校のコミュニケーションの中で絶対的で正義そのものだった。先生が言っていた、だとか先

生に言いつけてやるだとか何かにつけて私達は先生という正義の物差しを頼りに生きてきた。しかしそれは生徒が自分の意志や考えを持つ前に先生が言っていたことだし、思考を放棄して物事の真偽や優劣を決めていたとも考えられる。それを真っ向から否定する気はさらさらない。なぜなら思考を他人に一任することはとても簡単で責任がなく安心することだからだ。自身の意見や感性に自信を持ってない時、人は既視感のあるありきたりで「正解そう」なものに寄せにいつてしまう。その枠内に収まれば、

自分の意見という確固たる個性が揺らいだとしても似たものに囲まれる心の安らぎを獲得できるからだ。時に人は一人で堂々と咲く一輪咲きのバラのような個性を守るより、それを仲間と俯瞰して眺める小花でいる安定感を選ぶ方が重要なのだ。中学から高校に進学し更にこの先の未来を見通さなくてはいけない今、そんな考え方は深く理解できる。目立たないが孤立しない。唯一無二の存在として注目を浴びることはないが、新たな道を開拓していく覚悟は必要ない。自分の道を自分で築かなければいけない今は特に、自分の選択に責任を持ち、考えて行動することの難しさを感じる。前で先導してくれる人に呑気に付いていき、考えずに生きることは楽なことなのだ。

『逆ソクラテス』は短編の物語五つから構成されており、主人公は全て違うがお互いがどこかで繋がっている。共通点といえば全員が男の子であり、それぞれの学校生活で周りが普通に考え感じているものに「あれ、これってどうなんだろう」と疑問を持ち悩みながらそれぞれがもつと世界が良くなると思える道へ歩みを進めていくことだ。第一話で主人公の加賀「僕」は転校生の安

斎という大人びた同級生と共に、生徒のことを決めつける先生に考えを改めてもらうきっかけを作ろうと奮闘する。安斎君は「僕」に、決めつけてくる人間に負けない魔法の言葉を伝授する。

「僕はそうは思わない」

この言葉を讀んだ時、塞き止められていたダムの水が溢れるように感情が湧き上がった。そして最後の一行を讀み終え余韻の中から昔先生に言われた冒頭の一言が顔を覗かせてきて、心の揺らぎの理由が分かった。私が当時心の中で探していたのはこの言葉だった。不確かなパズルに丁度合う一つを見つけたられたような高揚感だ。先生を嫌いになったわけではない。言い争いをしたかったわけでもない。ただ、「私はそうは思わない」と伝えたかったのだ。

この本を讀んだことにより、私が日頃から感じていた責任感のない思考放棄への樂觀的な甘えは変化した。恐らく楽で安心感があることに変わりはないが、それは長い目で見れば「一瞬」の安堵なのだ。私達は成長する過程で自ら考え、問題に向かい壁を乗り越えなければいけない。そのためには幼い頃から自己の思考力を育むことが大

切だ。たとえ拙くとも周りと違う道に逸れたとしても、それが本人の個性であり、何か一つを正解と確定させることは二の次だ。意見が違うなら話し合い共有すればいい。単なる意見の突っ張り合いでなく、お互いが異なるものであると認め合うことが大事だと常に覚えながら。

最後に書き忘れていた五人の少年達の共通項がもう一つ。それは、五人とも共に考え悩み、全力で生きる友人たちがいたことだ。そもそも一人では意見の比べ合いなど出来ないのだ。彼らは相手の意思や意見に「私はそうは思わない、けれど、あなたの意見を認める」と言える相手こそ本当の友人であると教えてくれた。私はこれから太陽が白く見える道を歩んでいく。その道を尊重し肯定してくれる友を同じように尊重する人間になりたい。

ソクラテスよ、いい心がけとは思わないか。

体験書籍

『逆ソクラテス』伊坂幸太郎 集英社

## 【二ツ橋文芸教育振興会賞】

# 俳句甲子園漫遊記

石川県立金沢泉丘高等学校 三年

## 鈴木侑羽菜

「秋刀魚焼き秋刀魚で道を教へけり」

大爆笑の後、ひどく先生に怒られた。「俳句をなめとるのか」と言われ、「全然なめてません」と答えると、今度は悲しそうに呆れられた。これが、私の俳句生活のスタート。

句作の嚆矢は、ともかく佳句を沢山読み、なかから自分の琴線に触れた句をみつける。そして、その句にオマージュを抱きながら、少しずつ自分の側へずらしてみよう。これが、先生からのアドバイス。あくまで、秋刀魚の句を自分の側へずらすこと。なのに、秋刀魚と言えば大根が付きものだろうと、かの一茶の「大根引き大根で道を教へ

けり」の大根を秋刀魚に換骨奪胎したのは、願わずかつた。

中学生の頃から、YouTubeで俳句甲子園の動画を閲覧、ネットで本校も大会に参加しているのを知り、入学したら自分も出てみたいと決意。そして入学。しかし、四月、五月は臨時休校。その後は、分散登校。そもそも、授業がないのだから、部活どころではない。結局その夏は、本家の高校野球の甲子園も中止。もとより、俳句甲子園をや。翌年は捲土重来を期して、俳句甲子園の出場がかなう。と喜んでいたら、やはりコロナにより、俳句の聖地松山には行けないこととなってしまふ。

そして最終学年を迎える。臥薪嘗胆の末、全国大会出場をゲット。後は開催を祈るのみ。大願成就、無事三年越しの大会が開催される。

予選は、四チームの総当たり戦。一校目の鶯谷（岐阜）戦は兼題「七月」。一勝二敗で惜敗。二校目の横浜翠嵐（神奈川）の兼題は「日傘」。二勝一敗で勝利。そして最後の山形東（山形）戦。兼題「蚊」。一句目を僅差で取られ、後がなくなる。二句目は私の一句。

「菜の上の蚊を菜箸でつまみけり」  
「菜」と「菜箸」という文字のリフレイン。おひたしの蚊を、私が手では摘まめずにい

たところ、料理中の母が、宮本武蔵の蠅擱<sup>はえ</sup>の仕草よろしく、いともたやすく長い箸を操る華麗さを切々と説く。そして勝利。その後最終戦も取り、二勝一敗で勝利。この時点で、山形東と二勝一敗で並び、次の横浜翠嵐対鶯谷で翠嵐が勝てば、直接対決で山形に勝利した我が校のトーナメント出場となる。

この対決も最後の一句で勝敗が決することとなり、結局鶯谷が旗一本差で勝利。その瞬間、本校、山形東、鶯谷の三校が二勝一敗の三竦<sup>すく</sup>みとなり、山形東対鶯谷が山形の完封試合だったため、勝利数で本校は山形東に一勝及ばず、トーナメント出場はかなわなかった。

前日の抽選会で、抽選順の籤<sup>くじ</sup>がしんがりだったので、本抽選は引かないのと同じになる。予選も、他の二チームの勝敗如何<sup>いかん</sup>で、去就が決定するという按配<sup>あんばい</sup>。信心深くない私でさえ、流石<sup>さすが</sup>に他力本願<sup>たからかま</sup>という言葉が何度も脳裏をよぎる。結局、山形東はその後トーナメントに勝利し、全国三位となる。逃<sup>にげ</sup>がした魚は大きいと言うが、おそらく要諦<sup>たいてい</sup>は、魚の大小ではなく、逃<sup>にげ</sup>がした悔しさの大小なのだろう。

まだ総括するには早い、とはいえ私の高校生活は、コロナに振り回された三年間と言えよう。今回の俳句甲子園においても、五名一チームながら、選手を欠くチーム。最終戦まで進みながら、体調不良により、表彰式を待たずに、帰途に就くチーム。満身創痍<sup>まんそうじゆ</sup>の大会であったように思われるが、それは違う。

そういえば、七十四歳の女性の審査員の方が、七十五歳の男の審査員の先生に向かっ、「私たちが高校生の方に俳句を始めました。勿論その頃にはこのような大会はありませんでした。皆さんが本場に羨ましい」と仰る姿には胸を打たれた。また、「正直、三年間一度も大会に参加できない高校生が出るのは、何としても避けたかった。今回は、大会史上一番困難な大会でした」と振り返る先生もいた。

俳句は短歌より短い形式であるのに、原則季語を入れなければならない。だから最も大切なのは、季語以外の言葉が畢竟<sup>ひつじやう</sup>季語のためにあるということ。私が暮らす金沢は、四季のゆたかな街で、よく「弁当忘れても傘忘れるな」と言われる。「日傘さし祖母雨傘を届けけり」、私たちが金沢を詠

んだ一句である。

俳句が言葉の宝石であるなら、歳時記は言葉の宝石箱だ。ただ、宝石にも模造品があり、その真贋<sup>しんかん</sup>を見分けるのは高校生の手に余る。でも、実際に吟行し、句会を重ねることで、これまで如何に何も分かってなかったかということは、分かるようになった。無知の知。次第に、仲間の言葉のナイフは、ズバズバと切れ味が良くなった。そして、切れ味の鈍いナイフがこれまで幾つもの芳醇<sup>ほうじゆん</sup>な果実のような句を蔑<sup>あざむ</sup>ろにしていたかを知り、慄然<sup>りっぜん</sup>とした。

これまで私は、何かと開き直った毎日を送ってきた。そして大会中ついに後輩に、「また開き直っていますよ」と叱られた。けれども、仲間のナイフの傷は何故か心地よい。互いを高め合うためのものだから。私たちの宝物の俳句を披露する大会を催してくれた関係各位には感謝するのみ。道後温泉につかった後、松山城に登り、坂下の街を眺めながら思った。

体験書籍

『合本俳句歳時記 第三版』

角川書店 編 KADOKAWA

## 「二ツ橋文芸教育振興会賞」

# 決定！ 夏休み明けの目標

山梨県立都留高等学校 二年

## 小宮あかり

二〇二二年五月八日、私は腰までのロングヘアを、肩までのボブにした。人生で初のヘアドネーションをするためだ。三年かけて伸ばした髪をばつさり切った時、とても軽くなったのと同時に、大きな達成感があった。自分の髪の毛が、困っている誰かの役に立つと想像すると、気持ちが高揚して、重くて首が痛かったことも、洗うのも乾かすのも一苦労で、手入れが大変だったことも、一瞬でどこかへ飛んでいってしまった。

ヘアドネーションとは、寄付された髪

毛から作ったウィッグを、髪に悩みを持つ子どもたちに無償で提供する活動のことだ。私がヘアドネーションをやってみたいと思ったきっかけは、芸能人がカットする様子を、ユーチューブで配信しているのを観たことだった。高校の図書室で『31cm』を見つけた時、運命の出会いだと思った。ヘアドネーションを日本で最初に始め、私の髪の毛も送った、NPO法人ジャーダック初の監修本は、とても興味深く、読書が苦手な私でも次から次へと読み進めることができた。

「31cm」は、フルウィッグを作るために最低限必要な髪の長さだ。ジャーダックでは寄付された髪の毛だけを使って、人毛百パーセントのウィッグを作っている。どのような髪で作られたのかがわかる安心感と、レシピエントの役に立ちたいという、ドナーの純粹な気持ちが込められたウィッグは、人気が高いそうだ。一つのウィッグを作るには、およそ三十〜五十人分の髪の毛が必要になることを知って驚いた。きれいに切り揃えられた毛束の写真と、それに添えられた「届ける人にも思いがある。も

らう人にも思いがある。」という文が、脳裏に焼き付き、心に響いた。

この本のいいところは、様々な立場からヘアドネーションに携わる人たちの気持ちを知ることができるところだ。私と同じように髪の毛を提供するドナー、髪の毛をカットする美容師、そしてウィッグを受け取るレシピエント、病気の治療に関わる医療者、ジャーダックを設立した二人の理事。自分がやってみて、何となくわかった気になつていたが、ヘアドネーションの成り立ちや仕組み、寄付した髪の毛の先の話まで知って初めて、本当の理解になると気づかされた。

「必ずしもウィッグを必要としない社会」。これがジャーダックの理想と知ったことは、私にとって強い衝撃だった。ウィッグをつけることもつけないことも、当たり前前本人が選択でき、どちらも尊重する社会になつたら本当に素晴らしい。「ヘアドネーションの発展的な終了」を最終目標に、ヘアドネーションという活動を通して、髪に悩みを抱える人の存在を伝える。逆説的ではあるが、真理をついていると感じた。ウィッグを使っている人にとって過ごしやすい

社会は、使っていない人にとつても、今より少し見た目から解放され、過ごしやすい社会になるだろう。私の通う高校では、男子は短髪にしなくてはいけないが、髪を伸ばしたい男子もいると思う。ヘアドネーションに挑戦したい男子だっているかもしれない。男女関係なく好きな髪型で登校するには、校則を変える必要があるが、多様性を認め合う社会にするためには、考えなくてはいけない問題だと感じた。「誰かにとつて心地よい社会は、自分にとつても心地よい社会であるはず」という、ジャーダック代表理事の渡辺貴一さんの言葉に共感した。ジャーダックでは、提供するウィッグの六十三パーセントを脱毛症、二十一パーセントを無毛症、乏毛症、抜毛症、十六パーセントをがんの子どもたちに送っているそう。恥ずかしながら私は、脱毛症や無毛症といった病気を、この本で初めて知った。髪の毛がなくなる原因は、がんの治療によるものだと思ひ込んでいたのだ。周りの友人も、私と同じ考えの人がほとんどだった。「子どもたちが抱える問題を解決していくためには、まず知ってもらうことが大切」だと、私も実感した。

ヘアドネーションは、最も簡単なドナーとなる方法だ。髪を長く伸ばすことで、子どもでも挑戦することができる。私がいいたいと言つたら、母も一緒にやってくれた。母のきっかけとなったことも嬉しかったが、伸ばすのには時間もかかるので、一緒にやる人がいると、大変な時期も乗り越えやすくなると思う。私が伸ばしている理由を伝えると、自分もやりたいと親を説得してくれた、小学生の姉妹がいた。私の家の近くにはドネーションカットをしてくれる美容室がなかったが、母がお世話になっている美容師さんが、私たちが伸ばしている間に会社につけてくれて、ジャーダックの賛同サロンになつてくださったことは、本当に感謝している。私の周りでも、確実にヘアドネーションの輪は広がっている。「31cm」を高校の図書室で借りたのは、私が第一号だったことに気がついた。夏休みが明けたらたくさんさんの友人にアピールし、人気図書にすることが、私の次の目標だ。

体験書籍

『31cm ヘアドネーションの今を伝え、未来につなぐ』

NPO法人JHD&C 監修 KJU&Scip

## 「二ツ橋文芸教育振興会賞」

# 私にとってのファンタジー

愛媛県立小松高等学校 二年

曾我部 愛

私には兄が二人いるが、今、誰といてどこで暮らしているか分からない。急に結婚の知らせを寄こしたり、子どもが生まれたと知らされたり、私にとっては想定外の行動の多い兄たちである。子どもの頃のケンカでも、兄たちは私が歳の離れた末っ子の妹だからといって容赦することはなかった。そんな兄妹事情をもった私は、この本の主人公の弟にどれだけ憧れを抱いたことだろうか。いつだって弟のことを想ってくれる姉がいる生活。ファンタジー要素の多いこの本の中で、最も私にとって「ありえない」

のは姉弟愛そのものであった。

冒頭、弟のことを「大好きだった」「天才」「ひどくかわいかった」と、露骨すぎる姉の溺愛ぶりが示される。弟は頭が良く、指を鳴らすのが上手で、ぶらんこに乗るのがとても得意。ある不思議な事故で声をなくしてしまったけれど、動物と話すことができ、お話をつくるのも得意。並べてみれば自慢の弟として伝わってくるその魅力。この愛すべき弟は姉のことが大好きで、つくろのお話も姉のために書く。そこで悟った。確かに私は愛される要素がないと。

そもそも私は、兄たちに何かしてあげたことがあっただろうか。母から聞かされるのは、兄の誕生日ケーキをぐしゃぐしゃにしたとか、兄の服に落書きをしたとか、かつての私の愚行ばかりであった。私が鮮明に思い出す兄たちとの兄妹らしい思い出はお菓子の取り合いである。私のお菓子を奪い取ろうとする兄。必死でお菓子を守る私。私たちは、戦う兄妹であった。兄たちも私も互いに愛おしいなどという感情はなかったに違いない。ぶらんこ乗りとは、弟の紡ぐ物語の中の二人の男女。空中ぶらんこは



信頼が必要。お互いを思い合い、ずっと手をつないでもいられないが、つながないままでもいられない。そんなぶらんこ乗りの二人を姉に読ませるための物語に登場させた弟は、口には出さないが、姉のことを思いやっている。やはり私はこの弟のようになれる訳がない。それに気づいてしまった私は可愛がられる妹になりたいということをあきらめた。むしろ可愛い弟が欲しいと思うようになる。

「おたがいにいのちがけで手をつなげるのは、ほかでもない、すてきなこととおもうんだよ」どうしてこんな言葉をたった六歳で書いてしまうのだろうか。しかもたった一回サーカスを見ただけで。どんなインスピレーションを受けて、どこに着目すればこのような物語を書けてしまうのだろうか。そういうえば昔から私は兄たちのことを馬鹿にしていた。薄れた記憶だが、私がこの弟と同じ年の頃、兄たちは毎日母に怒られていた。怒られている兄を見ながら私は、怒られることをするなんて馬鹿だなど思っていた。兄からすれば十歳ほど歳下の妹に馬鹿にされるのは不愉快だっただろう。当時の私には、人を思いやる物語を書くのは

無理だった。純粹無垢の権化のような弟の紡ぐ物語を書ける訳がない。弟はよく姉にお話をつくって読ませるが、その物語は弟から姉への贈り物である。さらに私は弟をもつということに憧れるようになる。

主人公の母と父は二週間ほど海外旅行へ行き、現地の飛行機が墜落し亡くなってしまった。姉はひどく病んでいた。弟は飛び級をし、姉を越して中学生になり、またすぐに高校生になった。弟の最後のお話も姉のためのものだったが、弟はもうお話を書くかなくなっていた。弟はたった十二歳で大学生になり、父と母と同じように海外旅行に行ったきり帰ってこなかった。最後まで姉を思っていた弟。大人びているけれど本当に可愛かったと思う。そのときふと私は思い出した。父に押し入れに閉じ込められていた昔の私。ぎんぎん泣き叫ぶ私。押し入れの扉をあけるのはいつも兄だった。母も父もない夜、一緒に寝て、昔話を読むのはいつも兄だった。兄の友達はみんな私を可愛がってくれたし、兄たちだつてなんだかんだで私を可愛がっていたのかもしれない。兄のことをうつつうつつと思うこともある。もう一緒には住んでいないその

兄が、たまに家に帰ってきて、騒ぐだけ騒いで帰っていく。その後の家はずっと寂しくなる。私は兄の誕生日を知っていながら、プレゼントはおろか、お祝いのメールもない。兄はプレゼントの催促はするが、そもそも兄のほうは私の誕生日を知らない。そんな兄だが何でもない日にケーキを買ってくる。ちゃんと私の好みも分かっているように。私たちは戦う兄妹であったが、兄妹の誰かが親とケンカしたなら、当たり前

に兄妹の味方をした。  
「ありえない」姉弟愛は、一面では私の弟欲を刺激したが、また一面では、兄たちとのさまざまな物語の記憶を呼び覚ました。今、どこにいるか分からない兄だが、どこかにはいる。「きょうだい」とは、ぶらんこに乗るように、バランスを保ち、時に手をつなぎ、また手を離すものだ。

体験書籍

『ぶらんこ乗り』いしいしんじ

新潮社

## 【二ツ橋文芸教育振興会賞】

# 精一杯に輝く命のために

沖縄県立知念高等学校 三年

伊禮愛瑠

「『90年代における日本の三大死亡要因ってなんだと思う?』」「死亡要因の1位は、癌でも脳血管疾患でもない。決して教科書には載らない本当の正解。アウス——人工妊娠中絶だ」。これは、私が初めて『透明なゆりかご』を読んだ時に強い衝撃を受けた部分だ。助産師という夢がある私にとって、とても受け入れ難く、信じられない事実だった。

主人公の青田アオイは、看護師見習いとして由比産婦人科でアルバイトを始めた。由比産婦人科にはさまざまな妊婦が来る。

不妊治療を経て妊娠した妊婦、元々疾患を持っていて妊婦、十代の妊婦、中絶を希望する妊婦。助産師が、さまざまな状況にある妊婦達と関わっていく中で命の尊さが感じられる物語だ。そのストーリーで描かれている一人ひとりの妊婦の背景や、いつ何が起ころるか分からない危険と隣り合わせの分娩室の現場の様子、出産の大変さは、読んでいる私にひしひしと伝わるともリアルな描写だった。

私は、妊娠というのは、皆が望んでいる幸せの象徴であり、出産というのは、全て

順調に上手くいくものだと思いついていた。しかし現実はそのようではなかった。恋人との子供を授かって相手も逃げてしまったり、産める状況ではないのに避妊に失敗してしまったり、心から望んでもらえない、喜んでもらえない命があることを知った。出産も母子共にリスクを負う場合、母子どちらかしか救えない場合があることを知った。「中絶」という言葉もこの本に初めて教えてもらった。

小学生の頃から今までずっと、私には助産師という夢がある。小学生の頃はまだほ

んやりとしたことしか考えておらず、助産師の仕事は出産の手伝いをするだけでただだと思っていた。しかし、中学生になった頃、当時図書館司書をしていた母に『透明なゆりかご』を薦められた。読み進めていくうちに、これまで知らなかった妊娠、出産の現実や目標としている助産師の仕事の過酷さを知った。

『透明なゆりかご』には何人もの妊婦のエピソードが描かれている。その中でも私が一番印象に残ったエピソードは、辻村灯里さんという妊婦の話だ。辻村さんは夫婦円満で、初めての妊娠を心からとても喜んでいった。しかしある日思いがけないことが分かった。スクリーニングで赤ちゃんの心臓に異常が見られたのだ。更に胃も右に寄っていて、心臓の心房と心室もそれぞれ一つずつしかなかったのだ。このままだと生まれた後一週間も生きることが出来ない。そこで、辻村さん夫婦は中絶するか、命がどうなるか分からない状況で出産し、育てるかのどちらかを選択することを迫られた。こんな選択を迫られる妊婦がいるとは知らなかった。私はまた衝撃を受けた。辻村さん夫婦は悩んだ結果、妊娠を継続させる道

を選んだのだ。無事出産を終えた後も赤ちゃんはNICUに入れずに、母子同室で過ごすことを選び、生まれた後も体の状態が上手く回復できなかった赤ちゃんは、両親に見守られながら息を引き取った。短い間でも三人で過ごした時間は、とてもかけがえない特別な時間だったに違いない。このエピソードから、妊娠は全て上手くいくとは限らないこと。また、助産師は迅速で確かな判断をし、母子をサポートしていることを知った。辻村さんの赤ちゃんは生まれてすぐに亡くなってしまったけれど、最後まで両親の温かい愛情を沢山貰って幸せだったと思う。この本の最後に、「輝く命と透明な命、その重さはどちらも同じだということ。命とは、そこに存在するだけで等しく尊く、愛おしいものなのだ」と書いてある。その文を読んだ時に、その通りだと深く納得した。

私はまだ実際に体験し、経験してはいないけれど、この『透明なゆりかご』と出会って更に将来について考えるようになり、助産師を目指す気持ちが再燃した。また、祖母の紹介で助産師の話を書く機会を持ち、特に沖縄県は離島が多く、離島医療の厳し

さや、産婦人科医不足、助産師不足という厳しい状況があることを聞くことができた。だからこそ、やりがいがあり、素晴らしい仕事なのだ、エールを貰った。

沖縄は、第二次世界大戦によって多くの方が犠牲になったことを教訓に、平和を求め続けている。そして昔から沖縄には、命こそが宝という意味の「命どう宝」という言葉もある。助産師の仕事は命が関わる分、リスクも大きいけれど、一人ひとりの命のはじまりを精一杯に輝かせることができる。そしてそれを全力で支える事ができる。

今、私の力は小さな力だけれど、少しでも人の為になるような仕事をしたと思う。助産師という夢に向かって、実際の助産師に話を聞きに行き、看護や出産についての本を読んだり、夢を叶えるために、受験勉強に励んでいる毎日だ。

#### 体験書籍

『小説 透明なゆりかご』上・下 橘もも

沖田×華 原作 安達奈緒子 脚本 講談社

## 雨の日は、雨を聴くこと

作家

辻原登

一ツ橋文芸教育振興会賞受賞作から。

伊禮愛瑠さんの『精一杯に輝く命のために』は、  
「妊娠」をめぐる「さまざま状況」に「関わっ  
ていく人々の姿」を、「小学生の頃からずっと助  
産師になるという夢」を抱く「私」の目を通して  
温かく、冷静に捉えて、沖繩戦で犠牲になった人々  
の命へも思いを馳せ、「命どう宝」という珠玉の  
言葉に辿り着く。今年（二〇二二年）は沖繩本土  
復帰五十年。うっかりしてはいけけない。

曾我部愛さんの『私にとつてのファンタジー』  
は、「私には兄が二人いるが、今、誰といてどこ  
で暮らしているか分からない」というドキッとす  
る書き出しから、再び「今、どこにいるか分から  
ない兄だが、どこかにはいる」と結ばれる。しか  
し、中心部の文章では兄妹は手を結んで宙を飛ん  
でいる。そして両端に離れる。文による喜怒哀楽  
の空中ブランコ。「誰といて、」がとても切ない。

小宮あかりさんの『決定！ 夏休み明けの目  
標』。髪の毛を提供するドナー体験から、自分の  
髪の毛の行方を追って行くと、そこには思いがけ  
ない世界が広がっていた！ 髪にまつわる様々な  
古来からの言い伝えやエピソードにも触れてくれ  
ると、面白い「民俗学的考察」になったかも。

鈴木侑羽菜さんの『俳句甲子園漫遊記』は、体

験書籍の『合本俳句歳時記』よりも、「俳句甲子  
園出場体験」に重きを置いた臨場感溢れるリポー  
トで、「切れ味の鈍いナイフがこれまで幾つもの  
芳醇な果実のような句を蔑ろにしてきたかを知り、  
慄然とした」というフレーズに、時々遊びで句作  
などする僕はグサリとやられた。

加藤早絢さんの『白い太陽の道を歩む』。

「私はそうは思わない」。このありふれた言葉が、  
時と場合によってはアグレッシブで危険な、自己  
変革への合図、狼煙となることを、心のゆらぎと  
共に見出す、人生の新たな試練へと踏み出す、深  
い認識の一篇。

全国高等学校長協会賞の二篇のうちの二つ、飛  
永大維君の『僕の個性』。「苦手なことは職員室に  
入室する儀式と句読点が来ることに音読する人を  
替えていく、いわゆる『丸読み』だ」という冒頭  
のバラグラフに魅せられた。そして、苦手なこと  
は相変わらずだが、それでもやはり読書体験を通  
じて、「視力の弱い人がいるように吃音の人もい  
る」「僕の吃音は、僕の個性でもあるからだ」と  
結ばれる。壮（爽）快！ 「町田君」のことを知  
りたい。

能勢奈月さんの『一瞬と、向き合う』。フェン  
シングという、僕にはなじみの薄いスポーツだが、

仮面をした剣士の動き、撓う剣尖が描く波動曲線  
など、最も優美な競技の一つだろう。ハムレット  
とレアティーズの決闘を思い出す。そのフェンシ  
ングと茶道が能勢さんの中で偶然出会って、阿吽  
の呼吸をさぐり合う。「雨の日は、雨を聴くこと」。  
これ以上の人生の快味、極意はありえない。僕は  
昔、中国・広州市郊外のレストランで最高の経験  
をした。店の名は「聴雨軒（ティン・ユイ・シユ  
エン）」。バナナや榕樹に降る雨の音を聴きながら、  
友人達と老酒を酌み交わした。

文部科学大臣賞は恒川凜太郎君の『初めて見た  
見慣れた世界』。

自然観察で、「同定」という言葉が如何に重要  
であるか、教えられた。次のような炯眼の言葉が、  
僕の目を啓いてくれた。「教本を買っただけでは  
バイオリンは弾けない」「同じように、図鑑を買  
っただけでは同定はできないのだ。感覚を鍛える  
必要がある」。「ベニシダの多い公園で、ベニシダ  
が多いと感じる、これには何の不思議もない。し  
かし（……）。しかし……、である。「図鑑」を「人  
生」に置き換えてみよう。確かに僕達は、人生で  
常に「同定」に失敗している。しかし、この失敗  
が「経験」を作って行くのだろう。

# 未知性の揺らぎ

歌人

## 穂村弘

『初めて視た見慣れた世界』は、未知の体験を手探りで言語化しているところが魅力的だ。「かつての私の目は単にベニシダに反射した可視光を捉えていただけで、視えてはいなかった」「完全敗北を喫したと思った初日、背景だったものを視ようとしたその時、一度目の変化は訪れていたのだ」といった両義的に揺れ動く表現に惹かれた。明らかに正しいとわかっている認識を記述することは、既知の世界像をさらに踏み固めるだけでも云える。本作における認識プロセスの手探り感は、世界像の更新への叩き台として機能し得るものだろう。読書という体験の本質を考えさせてくれる文章だった。

『僕の個性』を読んでいて、はっとした。「彼は、僕の告白を受けた後、それまでと変わらず接してくれただけでなく、『きよしこ』を読んでくれたのだ。」「彼」とは「僕」が「吃音」を告白した友人だ。その前提にある『きよしこ』の感想を伝えながら告白するのが最適」という「僕」の発想にも感銘を受けた。このエピソードには、言葉の塊である本が現実の扉を開けた衝撃がある。「僕は優しい友達を持った」の一行もいい。特別な言葉だから、大切に改行されているのだろう。「一瞬と、向き合う」では、作者にとつての現実である「フェンシング」と体験書籍のテーマとし

ての「お茶」とのギャップが面白い。スポーツと芸道、西洋と東洋、動と静、一見かけ離れた両者を結びつけるのは、二つの世界を往還する作者の体験に根ざした直観と論理である。生の本質とも云える「今のこの一瞬」が、にも拘わらず捉え難く感じられることの不思議を思った。「フェンシング」にも「お茶」にも共通する「型」とは、「今のこの一瞬」の器なのかもしれない。

『白い太陽の道を歩む』というタイトルには謎がある。それ自体が短い詩のようだ。本文を読むことで謎は解けた。「太陽が白なんておかしいよ」という先生の言葉が、「僕はそうは思わない」という「安齋君」の言葉と化学反応を起こして、「私はこれから太陽が白く見える道を行んでいく」という自分自身の言葉を生み出す、その詩的なプロセスがスリリングだ。

『私にとつてのファンタジー』の文体には独特の生々しさがある。「きょうだい」に向けての「私」の思いは、微妙な揺らぎを見せている。時にはズレたり矛盾したりもしているような、でも、そこがリアルだ。逆に引き込まれる。人間の意識についての整然とした記述など、すべて嘘とも云える。ズレや矛盾を含みながら揺れる思いのすべてが「私」の真実なのだろう。

『精一杯に輝く命のために』では、知らなかった

ことを一つずつ知ってゆく過程が印象的だ。本から伝えられる現実の厳しさに衝撃を受けながらも、作者は助産師という自分の夢を失わない。そこから地元である沖繩の風土に思いを巡らせ、「命どう宝」という言葉の意味を再認識するところにも惹かれた。

『決定！ 夏休み明けの目標』はタイトルの明るい万能感が面白い。本の思想に共鳴した内容だが、その注目点は「必ずしもウィックを必要としない社会」という考えであり、「逆説的ではあるが、真理をついていると感じた」という感受は素直な共感の域を超えている。「私の通う高校では、男子は短髪にしなくてはいけないが（略）ヘアドネーションに挑戦したい男子だっているかもしれない」という展開もよかった。

『俳句甲子園漫遊記』は体験書籍に歳時記を選んだところがまずユニークだ。それによって読みの可動域が格段に広がる。「換骨奪胎」「捲土重来」「臥薪嘗胆」「大願成就」「他方本願」「満身創痍」といった語彙を多用した文体の選択によって独特のドライブ感が生じている。「俳句が言葉の宝石であるなら、歳時記は言葉の宝石箱だ」という一文も印象的だった。

# 読書が起こす革命

作家

角田光代

加藤早絢さんの『白い太陽の道を歩む』は、無責任な思考放棄をきっぱりと拒みつつ、「私はそうは思わない」だけにとどめず、「けれど、あなたの意見を認める」ところまで思考したことの意味がある。他の意見を認めるということは、白い太陽はおかしいと言った教師をも否定せず、認め、その意見の真意を考えていかねばならない。その先に思考の成熟があるように思う。

鈴木侑羽菜さんの『俳句甲子園漫遊記』は本人がたのしんで書いていることが伝わる躍動感がある。差し挟まれた俳句も効いていて、読んでいても、俳句とはこんなにアクティブな魅力を持っているのかと説得させられる。これからも俳句道に進んでほしい。

ヘアドネーションについて、YouTubeで知った小宮あかりさんは、その後ヘアドネーションを最初に日本に広めたNPO法人による本を見つけた。さまざまな立場の人たちのヘアドネーションについての考えを読み、ウィッグのいき着く先までを知り、はじめて「本当の理解」になると気づく。ヘアドネーションの輪を広げていくと決意するラストがすがすがしい。

『ぶらんこ乗り』に描かれるような姉弟愛こそが、自分にとってファンタジーだと曾我部愛さんは正

直に書く。小説には、自分と違う境遇、違う関係、違う考えの人たちが大勢出てくる。自分と彼らの差異に目をこらし、自身と、自身の身のまわりに照らし合わせてみる。やっぱり違ったり、意外に似ていたりする。それを発見するのもまた読書であり、心の揺れであると思わせる体験記だった。

伊禮愛瑠さんは小説化された『透明なゆりかご』を読んで、自身の将来の夢を見つめなおしたことを素直な筆致で書き綴った。「命どう宝」という言葉を胸に、これからも、産むこと、そして産まないこと、産めないこともふくめて、しあわせや不幸という観点からではなく、向き合っていくってほしいと思った。

フェンシングをやっている能勢奈月さんは、茶道の本を読み、動と静の両極から、本質的な共通点を見出した。「この一瞬」によって、まったく異なる動と静の世界をふとつなげてみせる、その書きようがうつくしかった。

飛永大維さんの、空想の親友の紹介がユニークだ。そして飛永さんには空想と現実の友だちがいて、双方が吃音について理解してくれている。『きよし』のきよしもまた、飛永さんの友だちになったことだろうと思う。これらの友だちに囲まれて、成長していく姿がこの体験記には描かれている。

恒川凜太朗さんは読書をきっかけにしてシダの同定を試みる。最初は見えなかったものが、次第に見えてくるさまを、ユーモラスに描く。これは世界の大改革だ。今まで存在しなかった世界が、読書によって、知識によって、立体的に迫力を持って立ち上がったのだ。その瞬間を、じつにいいに、読み手にもそれを感じられるように描写している。これからもきつともつともつとたくさん世界が立ち上がり、重なり合うことだろう。そのため、どうかさまざまなジャンルの本を読み続けてほしい。

# 行動する読者として

文部科学省  
初等中等教育局主任視学官

## 宮崎活志

恒川凜太郎さんは『初めて視た見慣れた世界』の中で、「かつての私の目は単にベニシタに反射した可視光を捉えていただけで、視えてはいなかった」と言う。確かに「見える」と「視える」ことは違うだろう。「認識する」とは、物事を見分けてその意味を理解することだ。読書の体験が認識する力を高め、自分の生きる世界を豊かな意味の世界に変えていく。読書体験が恒川さんの人生を豊かで楽しいものに変えたのは間違いない。「一瞬と、向き合う」では、能勢奈月さんが小学校二年生から始めたフェンシングとの関わり方を、読書が変えることになった。能勢さんが読んだ本のタイトルには「日日是好日」という言葉がある。禅や茶道などで大切にされる言葉だが、なかなかその境地には至らない。中学二年生でのスランプ以来の体験が、この読書を「自分事」として受け入れることになったのだろう。「一日一日を大切に過ごしたい」とは気負いなく強い言葉だ。

飛永大維さんの『僕の個性』では、読書が自分を孤独から解放し、周囲の人々を変えた。「吃音」を自分の個性として受け入れ、その受け入れた自分を友人や周囲の人々が受け入れていく。「辛い」や「苦しい」と「苦手」なことは異なる。「あまりのやるせなさに泣きたくなる」「僕は優しい友達を持った」などなど、短い文で表現される内容に読む者は心惹かれる。その表現方法にこそ、真に自己理解した人の強さが読み取れるからだ。加藤早純さんの『白い太陽の道を歩む』はとても暗示的な題名だ。小学校の図工の授業で太陽を白で描こうとした加藤さんに、先生は「太陽が白なんておかしい」と指導する。先生を判断基準にすれば、それで終わることかもしれない。だが、一冊の読書は、「僕はそうは思わない」という魔法の言葉を与える。「自ら考え、問題に向かい壁を乗り越えなければいけない」という加藤さんの歩む道は、強い日差しに厳しい道かもしれないが、鈴木侑羽菜さんの『俳句甲子園漫遊記』の「漫遊」には「気の向くままにめぐる」という意味があるが、全国高等学校俳句選手権大会への思い入れの強さは十分に感じられる。しかし、かつて蕉風俳諧が大切にされた「軽み」を思わせる文章は、読者の気分を重くさせない。新型コロナウイルスの波状感染拡大の中で経験した悔しい思いを、さりと吹き飛ばす精神性に心打たれる。

ヘアドネーションについての理解を深めた読書が、小宮あかりさんの『決定！夏休み明けの目標』だ。ヘアドネーションは、髪の毛を寄付して作ったウィッグを髪に悩む子供たちに提供する奉仕活動。小宮さんも参加した。「ヘアドネーションは、最も簡単なドナーとなれる方法だ」と書かれていて、子供たちへの思いを持ち続けることは決して簡単なことではない。その上、その本を夏休み明けに生徒たちの中で人気図書にすることも。読書を通して、きょうだいとの関係を結び直すことができるのか。曾我部愛さんの『私にとってのファンタジー』では、その道筋が丁寧に描かれている。兄たちとの関わりや記憶と、体験図書の世界が交差し、その真ん中で曾我部さんはこれまで見えていなかったものを見ようとする。ファンタジーは「ありえない」ことなのか。「ありうる」ことなのか。それを決めるのは読み手なのだろう。伊禮愛瑠さんの『精一杯に輝く命のために』を読んで改めて「命」について考えさせられた。生まれてくる子供の命、子供を慈しむ母の命。様々な状況の中で妊娠と出産という「命のドラマ」が展開される。伊禮さんは、離島も多い沖縄県で助産師を目指す。「命どう宝」という沖縄の言葉が、自分が向かう方向をしっかりと照らしている。読書体験は高校生の未来を確かなものにする。私は高校生の皆さんが人間として成長する姿を多く見てきた。「生きる力」を高める、そのきっかけに読書もあることをとてもうれしく思う。

# 読書の快楽は新たな世界の発見である

全国高等学校校長協会

林達也

私たちは「見るべき対象」、「聴くべき対象」を選別し、他はノイズとして捨象処理しています。

有用・無用の情報の判断は個々人の興味・関心に左右されます。したがって、世界の見え方も人それぞれであり、各人が異なる世界観を持っていると言ってもいいでしょう。恒川凜太朗さんの『初めて見た見慣れた世界』は、まさに「シダ」に課題意識を持ったことで、今まで見えていなかった新たな世界を「発見」し、新たな世界観を獲得した喜びを実に生き生きと語った秀逸な体験記でした。

能勢奈月さんは、一度やめてしまったフェンシングをライバルに勝ちたいという一心から高校生で再始動しました。しかし、相手を負かしたいという気持ちだけでは、勝利しても心は満たされませんでした。能勢さんの心に響いたのが、「お茶の世界」でした。動と静でまるつきり反対ですが、「一瞬を楽しむ」ことに気づきフェンシングへの思いも変容していったことが丁寧に描かれています。

飛永大維さんは、「どもる」こと「吃音」に悩んでいました。『きよしこ』を読むことで「孤独から解放され」、日常生活での生きづらさを克服するために友人への「告白」を決断します。それはまさに「告白」という言葉にふさわしい決断

だったのでしょう。「告白」の勇気を後押したのは一冊の本でした。目には見えない生きづらさ、第三者には理解されにくいコンプレックスも人と共有できれば力になりますね。

加藤早絢さんの文章からは現代の生きづらさが感じられました。コロナが蔓延している世界では目に見えない圧力が強く押し寄せてきます。学校行事が中止になるなど、日常的に息苦しい状況の中で「僕はそうは思わない」と誰もが叫びたいのだと思います。自己主張だけではなく他者に共感できる心のゆとりの必要性を強く感じ取れる文章でした。

小宮あかりさんは、きわめて前向きです。人は誰でも他者に認められることに生きている意味を感じます。図書室で手に取った本から、小宮さんの世界観が大きく変わっていったことが伝わってきました。ヘアドネーションに協力することだけではなく、「必ずしもウィッグを必要としない社会」、多様性を認める社会観を知ったことで、小宮さんの世界観が広がったことが伝わってきました。曾我部愛さんの『私にとってのファンタジー』を読んで戸惑いを感じながらも、応援したくなりました。兄との関係性は必ずしも良好とはいえない、というか実によくはない。「戦う兄妹」で

ある曾我部さんにとっては、姉弟がお互いへの思いで満ちあふれている作品はファンタジーではないと思いつつも現実を乗り越えていく力が感じられました。

伊禮愛瑠さんは助産師を目指しています。「透明なゆりかご」は人工妊娠中絶という重たい内容を題材としています。一概に是非を決めつけられないテーマであり、助産師を目指す伊禮さんも衝撃を受けたこと、それでも命を最前線で扱う助産師を目指す思いが伝わってくる文章でした。厳しい現実に向き合っていく伊禮さんを応援しています。鈴木侑羽菜さんの文章は軽妙洒脱で、よく練られた文章だと感心させられました。四字熟語や漢語を多用しながらも、体言止めとすることで、文に重々しさを感じさせず、自らの体験を伸びやかに鮮やかに描いており、俳句の世界観と相まって実に読ませる文章に仕上がっているなど感心させられました。

今回入賞した八人の皆さんの文章からは、読書体験による新たな世界観の発見、獲得を強く感じ取ることができ実に頼もしく思えました。さらなるご活躍を祈念しております。



# 第42回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

## 【優良賞】 39編

（ ）内は体験書籍名

北海道	道立	帯広柏葉高等学校	二年	齊藤小桃	私を書く（『線は、僕を描く』）
青森県	県立	八戸高等学校	三年	笹森知愛	私の扉をたたいた音（『その扉をたたく音』）
岩手県	県立	不来方高等学校	二年	山本夏生	姉が生きた意味と私の生きる意味（『11時間 お腹の赤ちゃんは「人」ではないのですか』）
宮城県	私立	宮城学院高等学校	二年	池田花南	どう生きるのかを問う（『私は私のままで生きることにした』）
秋田県	県立	大館桂桜高等学校	一年	山田日愛	知る感情と新たな感情自分との戦い（『学校に行けなかった中学生が漫画家になるまで 起性調査隊吉わたし』）
山形県	県立	山形西高等学校	一年	塩野爽空	心の傷と向き合うために（『絶唱』）
福島県	県立	相馬高等学校	一年	岡田咲幸	ありのままの私（『水を縫う』）
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	金子歩夢	孤独と私（『愛するということ』）
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	三年	平林大輝	仮初めの自由（『笑う月』より「靴」）
群馬県	県立	高崎女子高等学校	二年	七五三木 蘭	黄色い爆弾（『檸檬』）
埼玉県	私立	星野高等学校	二年	江口美優姫	私の「ふつう」は彼の「ふつう」じゃない（『みんなの「わがまま」入門』）
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	三年	猿渡 巧	非日常とのつきあい方（『よふかしのうた』）
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	一年	小澤真歩	髪がつなく笑顔（『髪がつなく物語』）
新潟県	私立	東京学館新潟高等学校	一年	手代木 幸	本が導く「戦争のない平和な世界」へ（『平和のバトン 広島の高校生たちが描いた8月6日の記憶』）
富山県	県立	富山中部高等学校	一年	天谷果愛	心の扉をたたく音（『その扉をたたく音』）
福井県	県立	武生高等学校	二年	坂下寛明	ずっと忘れない（『希望の地図 3・11から始まる物語』）
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	内藤采嶺	私にとって「生きる」とは（『勿忘草の咲く町で 安雲野診療記』）
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	大野百花	今を強く生きる（『運転者 未来を変える過去からの使者』）
静岡県	県立	掛川東高等学校	一年	佐野夢果	前に進むために（『キッチン』）
愛知県	県立	刈谷高等学校	一年	五十嵐真友	「死」と向き合う（『夏の庭—The Friends—』）
滋賀県	県立	高島高等学校	二年	初田百優	ツナグ気持ち（『ツナグ』）
京都府	私立	立命館高等学校	二年	一柳芽衣	親の介護（『長女たち』）
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	加藤 咲	「推し、燃ゆ」を読んで（『推し、燃ゆ』）
兵庫県	県立	加古川東高等学校	一年	大谷颯吾	「言葉」が私を変えた（『小説 言の葉の庭』）
奈良県	県立	郡山高等学校	二年	古川裕貴	寄り添うということ（『目がみえない耳もきこえないでもぼくは笑ってる 障がい児3兄弟物語』）

和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	和田彩芭	「吃音」の弟がいたから（「吃音—伝えられないもどかしさ—」）
島根県	県立	松江南高等学校	二年	女鹿田実咲	伝えることの意義（「新版 ナチズムとユダヤ人 アイヒマンの人間像」）
岡山県	県立	岡山工業高等学校	二年	植木このは	繊細（「気がつきすぎて疲れる」が驚くほどなくなる「繊細さん」の本）
広島県	国立	広島大学附属高等学校	一年	住田愛咲	「心の成長」とは（「その扉をたたく音」）
山口県	県立	岩国高等学校	二年	高嶋美結	才能と努力（「羊と鋼の森」）
徳島県	県立	阿波高等学校	二年	角田明優	ようこそ自己嫌悪（「ダメ人間 溜め息ばかりの青春記」）
香川県	県立	丸亀高等学校	一年	渡邊悠世	希望ある変身に向かって（「変身」）
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	池 心	玄太郎が教えてくれた立ち向かい方（「さよならドビュッシー」）
福岡県	県立	門司大翔館高等学校	二年	浅野千尋	見えなかつたものが見えたとき（「羊と鋼の森」）
佐賀県	県立	佐賀西高等学校	二年	増田晴奈	線は、私を描く（「線は、僕を描く」）
長崎県	県立	西陵高等学校	二年	富永京吾	新たな気づき（「20歳のソウル」）
熊本県	県立	熊本高等学校	二年	濱元理乃	私の道（「その扉をたたく音」）
大分県	県立	大分上野丘高等学校	一年	田尻 凜	一片（「ころ」）
宮崎県	私立	宮崎学園高等学校	二年	高山晴好	今、私に出来る事（「アフガニスタンに住む彼女からあなたへ 望まれる国際協力の形」）
北海道	私立	旭川実業高等学校	二年	勇川ころ	カラフルな人生（「カラフル」）
	道立	札幌月寒高等学校	一年	伊藤沙稀	勇気を出して、勇気を受け止める（「春にして君を離れ」）
	道立	札幌月寒高等学校	一年	小浅優哉	カメラが写した余命から得たもの（「瞬を生きる君を、僕は永遠に忘れない。」）
	道立	室蘭清水丘高等学校	三年	平野陽香	誰も孤独にならないために（「つながり続ける こしも食堂」）
青森県	県立	八戸高等学校	二年	中村 有	社会にアガペー（「自分のことだけ考える。無駄なものにふりまわされないメンタル術」）
	県立	八戸高等学校	三年	河原木茉洋	覚悟とは何だろうか（「覚悟の磨き方 超訳 吉田松陰」）
	県立	八戸高等学校	三年	倉成磨美	自分の弱点を知った（「思考の整理学」）
	県立	八戸高等学校	三年	坂本 葵	死を恐れないで（「最後の医者は桜を見上げて君を想う」）
岩手県	県立	一関第一高等学校	二年	及川陽実	どこまででも行ける切符（「幕が上がる」）
	私立	花巻東高等学校	三年	福田実音	あの日森を泳いでいた彼へ（「老人と海」）
	県立	盛岡視覚支援学校	一年	遠野希来々	正解とは（「博士の愛した数式」）
	県立	盛岡第一高等学校	一年	田鎖奏羽	影の被災者（「氷柱の声」）
宮城県	私立	仙台育英学園高等学校	一年	平間 成	違うことが当たり前（「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」）
	県立	仙台二華高等学校	二年	工藤千聖	議論すること（「2020年6月30日にまたここで会おう 灘本哲史伝説の東大講義」）

## 【入選】

### 188編（各県の校名・氏名は五十音順）

	県立	仙台南高等学校	二年	阿部優奈	大切なもの (『さよなら、ムッシュ』)
	県立	宮城第一高等学校	二年	船木香凛	コロナから得たもの (『あの夏の正解』)
秋田県	県立	秋田北高等学校	一年	辻谷詩音里	与えられた夢 (『夢を与える』)
	県立	秋田南高等学校	二年	今野惺琶	想像を創造せよ (『あるかしら書店』)
	県立	大曲高等学校	一年	熊谷広愛	今日を生きる (『1リットルの涙 難病と闘い続ける少女亜也の日記』)
	県立	大曲高等学校	二年	高橋柚羽	私自身の「さがしもの」 (『さがしもの』)
山形県	県立	上山明新館高等学校	二年	秋保心菜	自分らしく生きるには (『ぼくがスカートをはく日』)
	県立	長井高等学校	二年	新野智尋	旅をする、世界を知る (『明日は、いずこの空の下』)
	私立	羽黒高等学校	三年	守屋はな	生まれ変わったら… (『生まれ変わったも自分でいたいって思うために生きてる』)
	県立	米沢東高等学校	一年	上野蒼生	生きる意味を噛みしめて (『はい、さようなら。』)
福島県	私立	会津若松ザベリ才学園高等学校	三年	久保田のえる	背中を押されて (『修理さま雪は』)
	私立	尚志高等学校	一年	佐藤江茉	尊い明日へ (『僕らのこはんは明日で待ってる』)
	私立	聖光学院高等学校	二年	佐藤 優	魂を燃やす (『残酷依存症』)
	県立	橘高等学校	一年	塚野裕斗	思いを行動へ (『やる気に頼らず「すぐやる人」になる37のコツ』)
茨城県	私立	水城高等学校	一年	大内悠渡	ことば (『だんまり、つぶやき、語らいじぶんをひらくことば』)
	私立	水城高等学校	二年	小林星夢	子ども時代と将来の自分 (『アウシユヰッツの図書係』)
	県立	水戸第一高等学校	一年	小野真央	伝える言葉の力 (『本日は、お日柄もよく』)
	県立	水戸第一高等学校	一年	益子隆生	『悪人』を読んで (『悪人』)
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	一年	中村双葉	鳥カゴを抱えて (『青い鳥』)
	国立	小山工業高等専門学校	一年	守原一伽	自分を確立することの意味と意義 (『ラプラスの魔女』)
	県立	真岡女子高等学校	二年	金敷茉優	真の「寄り添う」とは。 (『レゾンデートルの祈り』)
	県立	茂木高等学校	一年	山本芽依	拝啓 山内桜良様 (『君の臍臓をたべたい』)
群馬県	県立	渋川女子高等学校	二年	山田 快	私を走らせるもの (『君が夏を走らせる』)
	私立	高崎健康福祉大学高崎高等学校	二年	今井志保	互いを認め合う社会を目指して (『自閉症の僕が跳びはねる理由』)
	県立	前橋女子高等学校	一年	増田磨夕	「普通」とは何なのか (『コンビニ人間』)
	県立	前橋女子高等学校	一年	山田朋実	私の居場所 (『かがみの孤城』)
埼玉県	私立	開智中学・高等学校	五年	湯浅武尊	映画職人のとびら (『スターウォーズ 制作現場 星・エヴァ・トニー・6 CREATING THE WORLDS OF STAR WARS 36 DAYS』)
	私立	星野高等学校	一年	上妻 愛	良い交友関係って? (『蹴りたい背中』)
	私立	星野高等学校	二年	堀越日菜	私の扉をたたく音 (『その扉をたたく音』)
	私立	星野高等学校	二年	村山裕香	扉の向こう側には… (『その扉をたたく音』)

千葉県	県立 袖ヶ浦特別支援学校	二年	竹内心優	「蓮」(何ぞうく、豊稜不出の視察、夢を三ニハ、ナル森を、言の、世界音の、世界を、三ニハ、ナルザ、と、樹を、た、い)
	国立 筑波大学附属聴覚特別支援学校	一年	荻輪 麟	繋ぐ思い (「ツナグ」)
	国立 筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	伊藤匠人	障害者と健常者の反転世界 (「ミラーワールド」)
	国立 筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	井上 颯	数学と私 (「フェルマーの最終定理」)
東京都	私立 学習院女子高等科	二年	室田羽菜	「多様性」にも弾かれる領域 (「正欲」)
	私立 聖徳学園高等学校	一年	生方千代美	私が見ていた「幻想」(「友だち幻想人と人の(つながり)を考える」)
	私立 聖徳学園高等学校	二年	松下文乃	言の葉を紡ぐ(「お探し物は図書室まで」)
	私立 東京農業大学第一高等学校	二年	湯元愛那	良心と知識 (「LGBTを読みとくクイア・スタディーズ入門」)
神奈川県	私立 相模女子大学高等部	一年	北岡実里	大人がすべて正しいのか (「山椒大夫・高瀬舟」より「最後の一句」)
	私立 聖セシリア女子高等学校	二年	草薙清香	多様性の可能性 (「ほくはイエローでホワイトで、ちよつとブルー」)
	私立 聖セシリア女子高等学校	二年	菱沼咲希	戦争は「人」の顔をしていない (「同志少女よ、敵を撃て」)
	私立 百合丘高等学校	三年	石川深雪	繋がる縁、繋げる縁 (「本好きの下剋上 司書になるためには手段を選んでいられません」)
新潟県	私立 第一学院高等学校 新潟キャンパス	一年	坂井天音	魔女たちの守る眠りと、私の夢想 (「魔女たちは眠りを守る」)
	私立 高田北城高等学校	一年	渡辺光里	「嫌われること」を恐れずに (「嫌われる勇気 自己啓発の源流「アドラー」の教え」)
	私立 新潟高等学校	一年	金子 愛	今を生きる (「ライオンのおやつ」)
	私立 新潟高等学校	一年	フム・アイン・ニュー	便箋の魔法 (「水曜日の手紙」)
富山県	私立 高岡南高等学校	一年	干場美音	生と死と私 (「西の魔女が死んだ」)
	私立 高岡南高等学校	二年	中山慧羽	「オリーブの木」とひまわりの花 (「生きる意味」)
	私立 砺波高等学校	二年	西岡里紗	普通って、何なん? (「流浪の月」)
	私立 富山中部高等学校	二年	中陣凜子	トカトントンに打ち勝つ決意 (「ヴィヨンの妻」より「トカトントン」)
石川県	私立 金沢桜丘高等学校	一年	一條日和	私の進む森への道 (「羊と鋼の森」)
	国立 金沢大学附属高等学校	二年	川原由梨奈	私と読書 (「鳥に単は似合わない」)
	私立 工業高等学校	一年	徳野珠有	戦争を知らない私ができること (「永遠の0」)
	私立 鹿西高等学校	二年	伊藤葵音	震災がもたらしたもの (「この川のむこうに君がいる」)
福井県	私立 武生高等学校	一年	近江遙香	ぼんくらと私 (「その扉をたたく音」)
	私立 武生東高等学校	三年	鈴木愛佳	星の王子さまが教えてくれたこと (「星の王子さま」)
	私立 丸岡高等学校	三年	増田琉那	広島原爆とウクライナ侵攻 (「70年分の夏を君に捧ぐ」)
	私立 三国高等学校	二年	高野愛海	自分にとつての家族 (「With You」)
山梨県	私立 甲府東高等学校	一年	宮下るな	あきらめないで (「かがみの孤城」)
	私立 甲府南高等学校	二年	武川友祐	思い出 (「百花」)

県立	日川高等学校	一年	阿部美来	新たな一步 (『その扉をたたく音』)
県立	吉田高等学校	二年	三浦美乃	小さな変化と大きな自分 (『スロウハイツの神様』)
長野県	私立 松本第一高等学校	二年	小林桃佳	未来から考える (『つくられた心』)
県立	屋代高等学校	一年	伊豫田茉愛	尊い人生を (『老師と少年』)
県立	屋代高等学校	一年	上原あい	たてとよこのありがとう (『嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え』)
岐阜県	県立 屋代高等学校	一年	脇本理沙	自分として生きること (『アンネの日記 増補新訂版』)
県立	大垣北高等学校	一年	堀 みう	本当の自分 (『青春ゲシュタルト崩壊』)
県立	大垣北高等学校	二年	松岡咲良	人生という名のカルテ (『神様のカルテ』)
静岡県	県立 加茂高等学校	二年	各務聖令	私を生きる (『この恋は世界でいちばん美しい雨』)
市立	岐阜北高等学校	一年	高井日菜	目が見えなくても (『できること』の見つけ方 全盲女子大生が手に入れた大切なもの)
市立	静岡市立高等学校	一年	小林桃花	「速く」ではなく「強く」 (『風が強く吹いている』)
市立	静岡市立高等学校	一年	志村琴子	子どもでも大人でもない (『まともな家の子供はいない』)
市立	浜松市立高等学校	二年	荒井瑞姫	「本当の自分」を考える (『人間失格』)
愛知県	県立 藤枝東高等学校	二年	佐藤けい	いつか大納言様が (『新潮日本古典集成〈新装版〉伊勢物語』)
私立	栄徳高等学校	一年	熊下実優	私、燃ゆ (『推し、燃ゆ』)
国立	豊田工業高等専門学校	二年	谷敷怜空	ゼロ抵抗なんてものはない (『高温超伝導の若きサムライたち』 日本人研究者の挑戦と奮闘の記録)
県立	豊田西高等学校	二年	渡辺葉月	未来につながる今 (『ジョン万次郎 ー海を渡ったサムライ魂』)
三重県	県立 豊橋東高等学校	一年	上田珠央	私を構成する一つの柱 (『モモ』)
私立	暁高等学校	一年	八田結奈	私の生き方 (『私は私のままで生きることにした』)
国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	野田流零	もっと自分を、もっと自由に (『博士の愛した数式』)
国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	安木心優	王子さまになりたい (『星の王子さま』)
滋賀県	私立 セントヨゼフ女子学園高等学校	二年	小川さくら	本当の家族とは (『そして、パトンは渡された』)
県立	安曇川高等学校	三年	齊藤綾花	ギフト (『蜜蜂と遠雷』)
県立	甲南高等養護学校	一年	伊東彬良	僕らの共通点の気付き (『見えない違い 私はアスペルガー』)
県立	東大津高等学校	二年	小嶋愛奈	努力のための結果 (『何者』)
京都府	県立 水口東高等学校	一年	西川明里	私たちは二度と繰り返さないと言ったから (『ある晴れた夏の朝』)
府立	鴨沂高等学校	三年	高橋倫太郎	血の騒ぐ方へ (『地雷を踏んだらサヨウナラ』)
府立	乙訓高等学校	一年	富永百輝	群れの中の一匹 (『西の魔女が死んだ』)
私立	京都女子高等学校	三年	加藤倅子	あいまい (『井上陽水英訳詞集』)
府立	嵯峨野高等学校	一年	浅井瑳月	成長の中で (『その扉をたたく音』)

大阪府	府立 河南高等学校	一年	北村美月	真の恐怖（「同志少女よ、敵を撃て」）
	府立 天王寺高等学校	一年	花原大翔	透明な私（「檸檬先生」）
	府立 天王寺高等学校	二年	佐藤琉世	当たり前の幸せ（「世界から猫が消えたなら」）
	府立 天王寺高等学校	二年	妹尾姫果	ひねくれ者のヒーロー（「建築家になりたい君へ」）
兵庫県	県立 川西緑台高等学校	一年	林 知里	死を感じる（「今夜、もし僕が死ななければ」）
	県立 神戸高等学校	一年	庄司真凜	「光」を見つけて（「県庁おもてなし課」）
	県立 姫路西高等学校	一年	夫津木千咲	個人を見つめて（「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」）
	県立 北摂三田高等学校	二年	塩田珠恵	見えない世界を開く鍵（「ちらのいた夏」）
奈良県	県立 畝傍高等学校	一年	米田紗樹	「しょうがい」を越えて（「難病カルテ―患者たちのいま」）
	県立 畝傍高等学校	二年	中井愛実	「友だち」の意味と答え（「きみの友だち」）
	県立 青翔高等学校	一年	小林慶悟	手のひらの中の世界（「池上彰の世界の見方 15歳に語る現代世界の最前線」）
	県立 高取国際高等学校	二年	小山莉琉	人の考え方、感じ方（「死にたいけどトッポッキは食べたい」）
和歌山県	私立 開智高等学校	一年	大村理葉	日常の終着点（「死神の浮力」）
	私立 智辯学園和歌山高等学校	一年	木村真由子	明日が平和であるために（「恋文讃歌」）
	私立 智辯学園和歌山高等学校	二年	小林莉子	「星の王子さま」とともに（「星の王子さま」）
	私立 智辯学園和歌山高等学校	二年	田村一花	変わる前に気付くこと（「かけがえのないもの」）
鳥取県	私立 青翔開智高等学校	一年	水野陽菜	自分でつくるよりよい対話（「お父さんはクールな娘に構われない 円満家庭のための交渉術」）
	県立 鳥取東高等学校	一年	井上満愛	いじめが教えてくれたこと（「雨の降る日は学校に行かない」）
	県立 米子東高等学校	一年	初沢咲織	気持ちのコントロール（「友だち幻想―人と人の（つながり）を考える」）
	私立 米子北斗高等学校	二年	深津匠飛	幸福論（「僕が死ぬまでにしたいこと」）
島根県	県立 出雲高等学校	二年	伊藤ももこ	本当の善意（「流浪の月」）
	県立 松江南高等学校	二年	石倉麻鈴	明日も生きようと思える夢（「がんばらないことをがんばるって決めた。」）
	県立 松江南高等学校	二年	川上小里	自分を好きになる事（「自分だけはいつも「自分の味方」マイベースの力」）
	県立 吉賀高等学校	一年	高久ゆう	後悔も人生（「みんなのなやみ」）
岡山県	県立 倉敷商業高等学校	一年	吉岡沙菜	人生と向き合う勇氣（「出会いサイト」で70人と実際に会ってその人に合いそうな本をすすめまくった1年間のこと」）
	県立 倉敷商業高等学校	二年	八ツ岩萌花	孤独を抱える全ての人へ（「52ヘルツのクジラたち」）
	国立 津山工業高等専門学校	一年	武地楓音	誰もが輝ける未来へ（「自閉症のぼくは書くことで息をする 14歳、ナチュラルリストの日記」）
	国立 津山工業高等専門学校	三年	佐古悠真	話し合っているは何も始まらない（「実行力 結果を出す「仕組み」の作りかた」）
広島県	私立 崇徳高等学校	一年	三井理生	建築家になりたい僕へ（「建築家になりたい君へ」）
	市立 広島市立沼田高等学校	一年	山本心愛	記憶（「今夜、世界からこの恋が消えても」）

私立	広島文教大学附属高等学校	一年	戸田史南	社会貢献は自分を変えてくれる？（『刑務所』で盲導犬を育てる）
県立	安古市高等学校	一年	大久保愛紗	子供ながら、大人だから（『ずっとそばに…』）
県立	大津緑洋高等学校 大津校舎	二年	南部和奏	逃げ場のないその場所で（『きみの友だち』）
県立	下松工業高等学校	一年	岩本リカ	桜咲く世界（『君の臍臓をたべたい』）
県立	萩商工高等学校	一年	中谷伊吹	私を変えた二面性（『腹を割ったら血が出るだけさ』）
県立	萩商工高等学校	二年	小茅海凜	加害者家族として生きるために（『手紙』）
徳島県	阿波高等学校	二年	佐藤 昂	寄り道は楽しい（『小学館学習国語新辞典』）
県立	阿波西高等学校	一年	松尾莉乃	ありがとうを伝えたい（『雨の降る日は学校に行かない』）
私立	徳島文理高等学校	二年	野中夕凜	出会いから生まれる音（『その扉をたたく音』）
県立	脇町高等学校	二年	佐古晴惇	心の扉を開けるために（『その扉をたたく音』）
香川県	坂出高等学校	二年	松山葉乃	本と向き合う（『本を守ろうとする猫の話』）
県立	高松高等学校	一年	江藤千桜	おばあちゃんと私の「おやつ」（『ライオンのおやつ』）
市立	高松市立高松第一高等学校	一年	河渕なずな	思いを受け継ぐ。力を（『平和は「退屈」ですか 元ひめゆり学徒と若者たちの500日』）
県立	高松南高等学校	一年	細谷珠生	殺される命（『犬に名前をつける日』）
愛媛県	松山北高等学校	一年	炭谷 優	本音に蓋をして（『おいしいごはんが食べられますように』）
県立	松山東高等学校	二年	李 喜延	「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」
県立	松山東高等学校	二年	谷村琉風	「母ちゃん」の国から（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
県立	松山東高等学校	二年	田房聖菜	従わないこと（『クスルプ』）
高知県	窪川高等学校	一年	平野琴葉	過去から今そして未来へ（『ガラスのうさぎ』）
私立	高知学芸高等学校	二年	亀井美結	「見えざる差」に気づくこと（『キーキの切れない非行少年たち』）
私立	明徳義塾高等学校 堂ノ浦キャンパス	三年	安住元輝	余命（『余命3000文字』）
私立	明徳義塾高等学校 竜キャンパス	二年	山下矩明	共存共栄（『建築家になりたい君へ』）
福岡県	九州産業大学付属九州高等学校	一年	田中瑞季	私だけの光（『きみはポラリス』）
県立	修猷館高等学校	一年	西野智也	脱イエスマンと人生（『オレたち花のバブル組』）
県立	筑紫高等学校	二年	堀切篤士	最高の読書感想文（『だれでも書ける最高の読書感想文』）
県立	筑紫丘高等学校	二年	花原美咲	光と影（『トルコのもう一つの顔』）
佐賀県	唐津東高等学校	一年	久保田華乃	「伝える」ということ（『ツナグ』）
県立	武雄高等学校	二年	北川 輪	「二人」の彼（『差別はたいてい悪意のない人がする 見えない排除に気づくための10章』）
県立	武雄高等学校	二年	中島 葵	蜜柑と純情（『蜜柑』）
県立	致遠館高等学校	二年	今泉琉鈴	自分の未来を探して（『その扉をたたく音』）

長崎県	県立 壱岐高等学校	二年 瀬口晃代	強さとは、走るとは（「風が強く吹いている」）
	県立 諫早高等学校	一年 村山璃莉	「忘れる人」と「忘れられる人」を繋ぐ道（「博士の愛した数式」）
	県立 佐世保西高等学校	一年 川上千尋	面倒くさくて大切なもの（「きみの友だち」）
	県立 猶興館高等学校	一年 堀川 恵	日常に小さな温もりを感じて（「エミリの小さな包丁」）
熊本県	県立 天草拓心高等学校 本渡校舎	二年 門脇璃々	それぞれの「普通」（「コンビニ人間」）
	県立 熊本高等学校	一年 宮下侑大	果たせなかったエンパシー（「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」）
	私立 熊本信愛女学院高等学校	一年 衛藤礼奈	学校と私（「かがみの孤城」）
	私立 文徳高等学校	一年 山口 遼	春と成り（「春となりを待つきみへ」）
大分県	県立 大分上野丘高等学校	二年 二宮陽菜	「人間合格」は善良ですか。（「人間失格」）
	県立 大分豊府高等学校	二年 藤浪 茜	言葉を守る辞書に感謝（「舟を編む」）
	県立 大分舞鶴高等学校	二年 阪本ひまり	米づくりから学ぶ「命」の繋がり（「生きるほくら」）
	県立 佐伯鶴城高等学校	二年 柳川未彩	classes（「リットルの涙 難病と闘い続ける少女亜也の日記」）
宮崎県	県立 宮崎大宮高等学校	二年 野崎惟心	空の青さに気づくまで（「空が青いから白をえらんだのです」奈良少年刑務所詩集）
	私立 宮崎第一高等学校	一年 古屋琥太郎	時刻表から日本を見る（「時刻表完全復刻版1964年9月号」）
	県立 宮崎西高等学校	二年 山中颯人	誰かを貶して自分は真つ当（「フリース」）
	県立 宮崎南高等学校	一年 松元海輝	人（「アームド」）
鹿児島県	県立 開陽高等学校	二年 矢上真帆乃	知ること次へ（「マイスマールランド」）
	私立 鹿児島第一高等学校	一年 武田悠花	伝統芸能の担い手として（「青葉の笛」）
	県立 鶴丸高等学校	二年 松坂 琴	生きる練習（「旅する練習」）
	県立 鶴丸高等学校	三年 松村和佳	何者かになる（「何者」）
沖縄県	県立 具志川高等学校	一年 伊禮門京佳	自らの疑問は自らの行動で（「赤毛証明」）
	県立 首里高等学校	一年 當間麻結	理解するということ（「自閉症の僕が跳びはねる理由」）
	県立 首里高等学校	一年 宮川清里香	みんなと違うこと（「Wonder ワンダー」）
	県立 那覇国際高等学校	三年 浦崎愛梨	愛のある人生（「100万回生きたねこ」）

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。（2月3日予定）  
<http://www.hitotsubashi-bks.jp>